

伝統木彫刻の継承とパブリックアートの可能性

いなみ国際木彫刻キャンプへの取り組みから



長谷川 総一郎（はせがわ そういちろう）

昭和20年生まれ 富山県出身
昭和43年 富山大学教育学部卒業
平成4年 富山大学教育学部教授に就任
専門は彫刻・美術教育
二紀会会員、県美術連合会常任理事、県彫刻家連盟顧問、井波美術協会会長、いなみ国際木彫刻キャンプコーディネーター

木彫りの里として知られる富山県井波町。この地で一九九一年八月、世界十一カ国から招待された三十九人の木彫刻作家により、第一回のいなみ国際木彫刻キャンプが開かれました。以来、四年に一度のペースで開催され、期間中、人口二万人余りの町は木彫刻一色に染まります。過去三回のキャンプに招待された作家は、四十カ国、二百十八人。来場者数は二十三万人を数えました。

銅器の街、高岡市出身の相本芳彦アナウンサーと、井波町出身でいなみ国際木彫刻キャンプの仕掛け人でもある長谷川総一郎教授は、変革期にある伝統木彫刻と美術教育のあり方をめぐって、おおいに盛りあげました。

ゆるやかな揺り戻しで再評価される井波彫刻

相本 先生、お久しぶりです。また、いなみ国際木彫刻キャンプ（以下キャンプ）の年がやってきましたね。

長谷川 毎回、マスコミの皆さんには二ユーソや番組などで取り上げていただき、ありがとうございます。

相本 今年は何回目になりますか？

長谷川 四年ごとの開催なので、オリンピック方式などといわれますが、一九九一年に始まって、今年が四回目です。



いなみ国際木彫刻キャンプは、井波町開町600年の記念事業の1つとしてスタート。国内外から木彫刻家を招聘し、公開制作を通して相互理解を深め、彫刻家と町民や県民とのコミュニケーションを図る。町と町教育委員会、富山県芸術文化協会、井波美術協会、井波彫刻協同組合、報道機関などを構成団体とする実行委員会が主催し、井波町を舞台に4年毎に開催されている。



相本 芳彦（あいもと よしひこ）

昭和31年生まれ 高岡市出身
昭和54年 慶應義塾大学を卒業後、北日本放送(株)に入社
平成12年 報道制作局制作部部長に就任

相本 それだけの準備期間は最低必要です。前回のキャンプにお邪魔して一番感動したのは、地元の中学生や高校生がボランティアとして清掃活動などに生き生きと参加していたことです。まさに町ぐるみの取り組みで、多感な年代の子どもたちにとっていい刺激になるに違いありません。

長谷川 富大生らも通訳などで協力してくれて、延べ二千人以上がボランティアで参加しました。木彫刻の技術を次の世代につなげていくこともキャンプの目的の一つですが、個性豊かな作家の皆さんとじかに触れ合うことは、若者にとって貴重な体験になると思います。

相本 取材して初めてわかったんですが、木の文化は世界中にあるんですね。これまで、ヨーロッパは石の文化というイメージが強かったんですが。

長谷川 森のあるところには、必ず木の文化が存在します。たとえば、ドイツ西南端に広がるシュヴァルツヴァルトの豊かな森林丘陵地帯のように、ちよっと郊外へ出ると見事な木の文化が育まれています。

相本 日本の木彫刻の特徴は？

長谷川 井波の木彫刻は二五〇年、宮大工は四〇〇年、木彫り信仰には六〇〇年の歴史があります。日本の木彫刻には、大雑把にいうと仏像・仏師の系列と大工彫刻の系列の二つがあり、井波彫刻は後者を起源とします。大正末期の民芸運動に関わった柳宗悦やブルーノ・タウトらは素朴な美しさを高く評価し、極限まで装飾を減らすことでマイナスの美学を追求しました。桂離宮のように簡素で、わび・さび

を重視したものが評価されたのです。その一方で、民間信仰では日光東照宮のような装飾過剰なものがあります。井波彫刻は、どちらかというと日光東照宮の流れといえます。

相本 代表的なのが、井波の得意とする欄間ですね。

長谷川 マイナスの美学から、やがてプラスの美学のなかにこそ民族の魂があるというふうを意識の転換があり、ゴージャスで精緻な井波の欄間はインターナショナルな造形として注目されるようになりました。そういう大きなうねりのなかで、井波彫刻も再び脚光を浴びつつあります。

鏡のような役目を果たす

異文化交流

相本 すると、井波でのキャンプの開催はまさにグッドタイミングだったわけ

ですね。今年の参加国は？

長谷川 一五カ国くらいになる予定です。

相本 作品もすばらしいんですが、作家の皆さんがそれぞれ個性的で、制作光景を見るのも楽しみの一つになっています。

長谷川 人と作品との一体感がキャンプの魅力であり、公開制作をテーマにしている点がほかの美術展とは大きく異なります。それだけに、人の選抜には現地に赴いて面接するなど大変神経をつかっています。

相本 なるほど。キャンプの成否を左右するのは作家選びですか？

長谷川 もともと作家には気難しい人が多いので、まったく環境の異なる土地へ来て制作するわけですから、本来、うまくいくわけがないんです。そこで、できるだけリスクを小さくするためにコーディネーターとして頭を悩ませます。

相本 公開制作に向くと、性格的に向かない人もいますよね。

長谷川 当然、向き、不向きはあります。

言葉も文化も違う土地へ来て、真夏の暑さのなかで初対面の人同士が半月ほど寝食を共にし、しかも公開制作するわけですから、プレッシャーは相当なものです。

り知られていないのが残念ですが、日本で唯一の木彫刻集団の町として、あくまでも井波から世界へ発信するという姿勢にこだわっています。

木彫刻の技術集積を町おこしに活用

長谷川 「また参加したい」と、しつこいくらい手紙をくれる人もいます(笑)。企画する側にとって一番嬉しいのは、キャンプに参加したことを作家全員が生涯の喜びと感じてくれていることです。

相本 先生が彫刻の道へ進まれたのも、井波の風土と決して無縁ではなかったといえますね。

相本 でも、過去に参加した作家からラブコールもあるのでは？

相本 なるほど。そういうDNAがあったわけですか(笑)。

長谷川 ももちろんです。作家同士の横のつながりは、すごく強いんです。負けず嫌いが多いため、ライバル意識が刺激されるようです。

相本 以前井波彫刻のすばらしさは、前、横、後ろ、斜めと、どこから見ても立体的な仕上げにあると聞いたことがあります。

相本 井波には日展作家も多く、人口に占める彫刻家の割合はかなり高いですよ。

長谷川 確かにそうですが、井波欄間そのものも変化しています。もとはシンプルな構図でしたが、やがて彫りが複雑になり、次第に豪華になってきました。精巧さは変わりませんが、だんだん肉厚になり、欄間の立派さを功名のシンボルととらえる人々のニーズが現在の井波欄間を育ててきたといえます。ただ、欄間に取って代わるものに不安があります。

地元を離れていたため、帰ってきた当初は横のネットワークが断絶されていて、なかなか受け入れてもらえませんでした。獅子舞や祭りの笛ひとつ吹けない奴は相手にされないというか(笑)。そこで代って、地元で何かをしたいという愛着が生まれたのかも知れません。

相本 その点、ヨーロッパの美術館はすごく自由ですね。寝っ転がって見てもいいし、何時間でも自由に鑑賞して構わないんですから。

美術教育の変革は、学校教育と地域教育の視点から

相本 私事ですが、うちの子の美術の成績があまりにも悪いので先生に理由を尋ねたところ、「二時間で仕上げられなかったから」という返答に親として憤りを感じたことがあります。

長谷川 ヨーロッパの美術館は日本の倍近くの歴史があり、市民生活に溶けこんでいます。監視員が平気でバナナを食べていたり(笑)。美術品の監視は大事ですが、日本はちょっと過剰反応じゃないかという気がします。

長谷川 現場の先生も苦勞しておられますし、我々も反省しなければなりません。戦後の美術教育は感性や好みを重視し、自己表現に大きく傾倒してきた経緯

が非常にいい教材ですね。

長谷川 美術鑑賞はきわめて知的な営みであって、歴史や背景をきちんと知らないときけません。作ることだけが美術教育だという考えでは、熱心にやればやるほど子どもたちを美術から遠ざけてしまふ結果にもなりかねません。美術鑑賞は実物を見ないとスケール感はわかりませんし、質感、光、色などを見るには本物でないと。

相本 図録を何度も眺めるより、美術館へ一度足を運ぶ方がよほどためになるというか。



長谷川 頭が空っぽの状態では彫刻をやっても、何も生まれません。彫刻は削りくずが出て汚れるし、清潔志向の現代にはなじまない芸術なんです(笑)。ですから、



地元のことをしっかりと学ばせることが大切です。

相本 国際化すればするほど、自己のアイデンティティ(地域性)が求められるということですね。きょうはとても興味深いお話を聞きまして、八月のキャンプの取材に行く楽しみが増えました。

長谷川 おおいに期待してください。目下、私の頭の中は今年を通り越して二〇〇七年のキャンプのことについてばいばい。相本さんにはPRの方をどうかよろしくお願いします(笑)。



パブリックアートとは、野外彫刻や外部壁画など、公共スペースなどに設置されて誰でも自由に見られるアートを指す。

育った高岡市も、今はすっかり銅器の街として定着していますが、最初は鑄物の街でした。鑄鉄物から始まり、たまたま大阪で人気を博していた美術銅器を手がけたところが大ブレイクしたため、次第に銅器の街として知られるようになったのです。しかし、銅器の次にくるものがまだ見えません。

対談を終えて...

四年前の井波木彫刻キャンプは今でもはつきりと覚えています。東京から参加された作家の方があまりにも日に焼けておられたため「Where did you come from?」と尋ねて大笑いされました。夕方になると体操服で木屑を片付けにくる中学生のひたむきさ。数々の作品とともに忘れられません。今年はどうな作品やエピソードが生まれるか、取材に行くのが楽しみです。

今回の対談では、長谷川先生の作品そのものについてお話を聞くヒマがなかったため、是非機会を改めて伺いたいものです。(相本彦彦)

編集委員会から、この対談の話があった時、最初はお断りしたんです。彫刻キャンプの顔は町長さん。私ではないので他の先生方がいいと思っただけ。しかし、結局引き受けることにしました。というのは、国内外の文化事業の事例を見ると、提案者である大学教授や彫刻家がカリスマ的にトップをつとめている場合、その後は発展的に広がっていないんです。私は、井波の町が好きだし、井波彫刻もどんどん発展してほしいので、利他的動機が長続きの要と肝に銘じてやっています。

相本さん、早口でごめんなさい。キャンプの作品が完成した暁には、ゆっくり話し合いますよ。(長谷川総一郎)

富山湾の海底は

どのような地形になっているか

海の幸が豊富なことで知られる富山湾は、深層水製成が売り出されてから、全国的に一段と知名度が上昇した。今回は、本学の地元でありながら意外と知られていない富山湾の海底地形について紹介する。

深海湾とは

水深が三〇〇mを越える海は深海とよばれる。一方、深海底というと一〇〇〇mより深い海底を指す場合が多い。日本

写真1 しんかい2000



海洋科学技術センター：提供



図1 富山トラフ

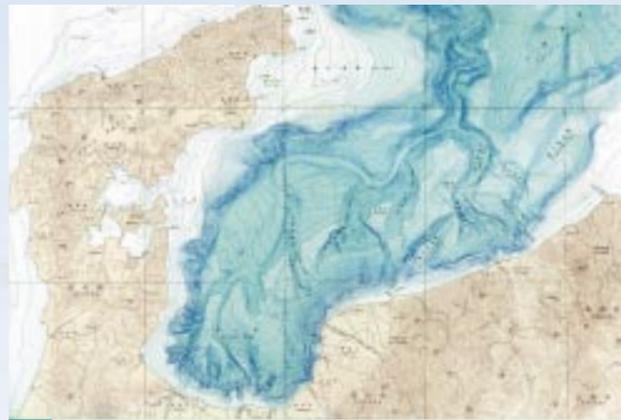


図2 海上保安庁海洋情報部発行の海底地形図(大陸棚海の基本図 第6662号抜粋)

列島で湾といえば、島々縁どる比較的浅く平坦な場所(陸棚)にある湾がほとんどで、深海底をもつ湾はたった三箇所しかない。本州中央部太平洋側の相模湾・駿河湾、そして日本海側では唯一、富山湾だ(図1)。三深海湾とも、本州島に食い込む細長い低地(相模トラフ・駿河トラフ・富山トラフ)につながることや、山地・山脈に隣接する共通性がある。富山湾では、一九八三年に他の海域に先駆けて有人潜水船 しんかい2000の調査潜航が行われた(写真1)。以来、富山湾とその周辺海域は四〇回もの潜航が行われている。

富山湾の構造

富山湾は本州から突き出た能登半島の東側にある深みで、湾の底は水深一〇〇〇〜二二〇〇mの平坦な盆地だ。この盆地は富山深海長谷の源流部にあたり、富山深海長谷が、北に向かって延々と蛇行しながら日本海中央部に向かい、水深約三三〇〇mの日本海盆で深海扇状地をつくっている。富山湾底の盆地を取り巻く斜面は、場所によって異なる三つの特徴

がある(図2)。まず、新川地域の海岸線の形からすぐわかるように黒部川扇状地が湾の中にはり出している。この扇状地は海底でも幅をきかせていて、富山湾の最深部は北西側に押しやられている。一方、石川県側の七尾湾沖から九十九湾沖にかけての陸棚斜面は、南北方向に直線的で急崖になっている。両地域に挟まれた湾奥部の氷見(射水沖)では、地元の漁師が「あいがめ」と呼ぶ海底谷が発達している。

海底からわき出す地下水

本理学部地球科学科では、毎年富山湾で海洋地質調査実習を行っており、こうした海底地形を音波探査装置で調べ、思い思いに考察した結果をレポートする。一九九九年の実習では、七尾湾沖の急な崖(水深約八五〇m)でドレッジと呼ばれる堆積物採取の結果、ストローのような管に住むミミズに似た動物が多数採集された(写真2)。この生物は九十九湾に生息するマシコヒゲムシという管ヒゲ動物(ハオリムシの近縁種)に似ていることから、もしハオリムシ系ならば海底活断層に沿って湧き出る海底地下水に頼って成立している深海特有の生物群集ではないかと注目された。このため、二〇〇〇年および二〇〇一年には、私(地質学)と生物圏環境科学科の張助教(地球化学)、広島大学生物生産学部長沼毅教授(海洋生物学)の共同で、しんかい2000の潜航調査が実施された(写真3)。氷見沖から七尾湾沖にかけては定置網漁業が盛んだが、潜航調査では漁網が障害となつて調査は難航し、管ヒゲ動物の生息環境が



写真2 管ヒゲ類

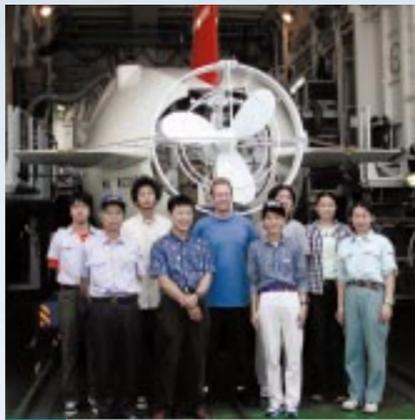


写真3 共同研究者とのスナップ(筆者は左から2人目)



写真4 オオグチボヤ

海底活断層や湧水帯と関係があるかは謎のまま残った。そのかわり、オオグチボヤの群生地が思いがけず発見された(写真4)。この生物はその名のとおり大口

写真5 自動航走式ロボット潜航艇

「しんかい2000」は停年のため二〇〇二年度で退役することになった。しかし私は日本海では未確認のチューブワームを富山湾で発見しようという執念を燃やしている。なぜ地質学者が生物を探すのかと首をかしげる人もいるだろう。しかし深海生物にとって活断層や海底熱水噴出孔は砂漠のオアシスなのだ。富山湾にもそんな暗黒のオアシスがあるのではないかと。今年の夏からは、海底探査装置を搭載した自動航走式ロボット潜航艇(東京大学生産技術研究所の浦環教授が開発(写真5))で富山深海長谷と富山湾の調査を計画している。音波を使った広域で精彩な海底画像が得られ、海洋化学探査によって活断層や湧水帯の位置が特定できれば、深海のヴェールに包まれた謎に迫ることも期待される。

海洋地質学の魅力

今、明らかにになったこと

採集したオオグチボヤの内臓を張助教が化学分析した結果、餌に含まれていたらしい地下深部由来のメタンが検出された。「しんかい2000」の潜航で調べた直線的な陸棚斜面は、能登半島の代表的な邑知活断層帯の北東延長にあたる。同帯南縁にある石動山断層沿いには地下深部由来のメタンを含む温泉があることから、富山湾の海底活断層と湧水生態系を結びつける状況証拠はそろったといえる。



竹内 章 (たけうち あきら)

Takeuchi Akira

理学部 地球科学科 地球ダイナミクス講座
1950年 10月生まれ
1973年 金沢大学理学部卒業
1979年 大阪市立大学大学院理学研究科博士課程修了
1979年 富山大学理学部助手を経て、1997年理学部教授
専門分野：構造地質学・海洋地質学

「ハリー・ポッターのよつな

夢と希望のある空間に」

高校時代は放送部員でしたが、自分でアナウンサーより学芸員の方が向いていると思い、人文学科に入学しました。その後一般教養の授業で書いたレポートが恩師の福田立明先生の目に留まり、「文学を勉強したらいい」とアドバイスをいただき、専門課程で語学文学科へ移りました。要するに、おだてられて木にのぼったわけですね笑。

北海道から沖縄まで旅した学生時代、好奇心旺盛だった私は、在学中から勉強そっちのけでいるんなことにチャレンジしました。旅行研究会に所属し、ヒッチハイクで北海道を旅行したり、沖縄でスキューバダイビングのライセンスを取得するなど、北から南まで旅して歩きました。旅費を稼ぐためのアルバイトも数知れず、家庭教師や塾の講師のほか、ビールのキャンペーンガール、ウエイトレス、絵のモデル、接骨院の助手、司会、地味なところでは封筒の宛名書きの内職もしました笑。

卒業後は、山梨県清里にあるオルゴール博物館に学芸員として就職。初志貫徹したというより、旅行



やや緊張した面持ちで、H IIロケット打ち上げの実況中継を担当

で訪れて以来、清里とその博物館がすっかり気に入っていただけです。

千載一遇の経験をした、

フリーアナウンサー時代、しかし一年後には、地元山梨のラジオ局のアナウンサーに転職しました。いつも聞いていたFMから募集告知が流れてきて、今の私なら大丈夫かな？と思ったんです。新卒ではないところが面白がられたのか合格。

その後、フリーになり、宇宙開発事業団(NASDA)のH IIロケット打ち上げの実況放送も担当しました。種子島で合宿生活のような日々を過ごし、大勢のスタッフ全員が一つの目標に向かうという、心地よい緊張感を体験しました。

ところが、肝心のロケットは静止軌道投入に失敗。宇宙開発事業団にとっては初めての打ち上げ失敗で、不運といえませんが、私にとっては忘れたい思い出となりました。

富山を離れて十年目のUターン、ふるさとには遠くにありて思っている、

なんて突っ張ってき

た私も、このまま帰れなくなるのではな

いか、という焦燥感を

を次第に感じるように

なりました。これも長

の宿命でしょうか。ち

ょうどその頃、今の放送局から声をかけていただいたのです。

「アナウンサーになるにはどうしたらいいですか？」とよく質問されますが、どんな職業でも、コミュニケーション能力を身につけることが大切だと思います。いろんな場面や展開を想定して、下準備をきちんとしておくこと。勉強に限らず、いろんなものを見たり、聞いたりして吸収しておく。人間としての引き出しの多さが情感豊かな人生につながるのではないのでしょうか。

どこにいても本人の意欲さえあれば輝けるはず、場所とは問題じゃありません。あの頃、富大は先生方の目が行き届いていて、学生一人ひとりの個性を尊重しようという雰囲気を感じられました。お世辞でなく、そういうキャンパスで育まれたことに心から感謝しています。



「どこにいても本人の意欲さえあれば輝けるはず」と語る柳下さん

柳下詩織氏 (やなぎした しおり)

昭和44年 魚津市出身
 平成元年 富山大学人文学部語学文学科卒業
 学芸員として山梨県のオルゴール博物館に就職
 平成2年 アナウンサーとしてエフエム富士入社
 その後、フリーになり、青森や埼玉のテレビ局を経て、
 平成12年 チューリップテレビに入社
 「富山とびきり木曜日」、「越中人譚」、「金曜だいすき」、
 ニュース等を担当
 著書に『ふたりの時計、ふたりの地図』(明窓出版)がある

機器分析センター



森センター長と中村助教

センター長(兼任 工学部教授)
森 克徳 (もり かつのり)

助教
中村 優子 (なかむら ゆうこ)

技術専門職員
山田 聖 (やまだ さとし)

併任教官
中村 省吾 (なかむら しょうご)

丹保 豊和 (たんぼ とよかず)

黒田 重靖 (くろだ しげやす)

佐竹 洋 (さたけ ひろし)

蓮覚 寺聖一 (れんがくじ せいいち)

神阪 盛一郎 (かみさか せいいちろう)

機器分析センターの役割

平成十三年から十七年までの研究開発に関する国の第二期科学技術基本計画では、科学技術創造立国を目指す我が国が進むべき道としてライフサイエンス、情報通信、環境そしてナノテクノロジー・材料の四つの重点分野が示されました。各分野では世界水準の研究や技術開発が要求され、大学にもその役割が求められるようになっていきました。

もともと大学は高等教育機関であり、研究者は先駆的な学問や技術を進展させ教育に反映させてきました。現在は、その成果を社会にも還元し、より活用することが求められています。その要求に応じるためには、従来のように一人の研究者、一つの研究室にゆだねる手作業研究体制だけではなく、関係する研究者間で機器を共有し、利用するプロジェクト研究体制を採る必要があります。

特にさまざまな分野での大学発の大型プロジェクトを推進するためには、学内既設の大型計測分析機器の

機能的センター

共同利用の促進と効率的な運用を図り、必要な分析技術を研究・開発することが不可欠となっています。

このような目的を達成するための施設として平成十二年四月に本センターが設置されました。

機能的センター

本センターは、ナノ構造解析部門、表面分析部門、分子構造解析部門、生体・環境情報解析部門、材料機能解析部門、物性計測部門の六つの部門からなっており、各大型機器はそれぞれ専門の研究者によって運用・管理されています。

各部門では、機能性材料のミクロ構造から分子構造あるいは表面の形態・状態を測定し、物性との関連性を追及したり、生体関連の情報を扱うなど、多方面の研究が行われています。

しかし、研究の高度化にはそれのみあう高度な測定装置や従来装置の新機種へ迅速な整備拡充が必要です。また、精密機器の管理及び操作技術を有しデータ解析のできる専門スタッフも必要であり、現在はそれらの問題に対応できるよう努力しています。

講習会、研究会など

本センターでは、学内の大型機器



研究会・講習会風景

の原理や取扱方法、データ解析などについて講習会を随時開催しています。学外からも参加していただき、機器管理責任者との情報交換も行っています。

また、県内民間企業や公的機関研究者、学生教員を対象とした、分析機器関連の研究発表会を開催し研究情報も交換しています。さらに機器の共同利用を通じて学際研究への支援をできるだけ行っており、このようにして得られた研究成果は年報として発行しています。

本センターの目指すもの

将来的には、化学分析に関する機器から材料の物性計測機器まで幅広い分野の先端的大型機器の整備・拡充を図り、自然科学の基礎的な研究から先端的应用技術の分野までの広い範囲での研究教育を支援する基盤センターを目指します。



『ブラックジャックによろしく(〜)』

著者：佐藤秀峰 講談社刊 価格：各533円

『医龍(〜)』

著者：乃木坂太郎 小学館刊 価格：各505円

実は、私はここ四半世紀漫画雑誌を読んだことがない。しかし、単行本になった面白そうなコミックは時々読む。この二つのシリーズは、中でも特に面白い。どちらも、医の現場で、苦悩し、苦闘する若い医師が主人公だ。『ブラックジャック』による『〜』では月給三万八千円の研修医が、『医龍』では型破りな流れ者だが腕のいい医者で、硬直した現実をうち破ろうと奮闘するさまは、一つの人間ドラマだ。いずれも現代日本の医療が抱える根深い問題、縦割りの医局制など大病院の深い闇が象徴的にあぶり出されている。

しよせん漫画と言えは漫画なのかもしれない。シンボリックに描き出しているが、そのリアリティは安っぽい。しかし、このおぞましくも滑稽な医の闇はおそらく小説では描ききれなかつたろう。告発調のルポルタージュでは医者の視点や苦悩は十分にすくい取れない。漫画だから許される誇張とチープな描写があればこそ、逆に成功しているのだ。

「大の大人が漫画なんか読んで」という小言は以前からあるが、知らないところで大人向けの社会派コミックスが進化していたのだ。読んで損したということはないと思う。漫画だから、漫画なんて読まないと言っている人もどうぞ一読あれ。

(加藤重広)



『環境と化学 グリーンケミストリー入門』

編者：柘植秀樹、荻野和子、竹内茂彌(たけうち しげや) 富山大学教育学部教授
東京化学同人刊・2002年 価格：2,200円



この本は化学の教科書である。端からこんな書きかたをする、ほとんどの人が自分とは無関係な本であると思ってしまうかもしれないが、ちょっと待ってほしい。物を製造する段階から環境への影響を考へて材料を選んだり、リサイクルすることを前提に部品をデザインする。これが副題にあるグリーンケミストリーの基本的な考え方である。この本はこの理念を理解するために書かれた化学の本といってもよい。

人が毎日からだの中に取り込んでいる空気や水を題材に取り上げて、さまざまな汚染の現状を詳しく紹介し、環境問題を理解する上で必要な化学的知識を随所にちりばめるといった構成になっている。

難しい化学の知識を記述した部分や章末にある教科書的な演習問題は、興味があれば読み飛ばしてもかまわない。環境汚染は悪であるというだけではなく、汚染しないで生きるにはどうしたらよいか、具体的に考えてみませんか。

(伊藤研策)

教育学部 社会科教育・人間環境ゼミ

藤原研究室

Social Studies and Global Education

<http://www.toyama-u.ac.jp/tfuji/>



◀後列右端が藤原先生

「ひょうたん島ワールド」へようこそ！
国際理解教育の学習デザイン開発

学校で導入されている総合学習教材「ひょうたん島問題」は、進んだ文明を持ち伝統を重んじる、ひょうたん島の島で、やせた北の島から来た勤勉なカチコチ人と、食料に恵まれた南の島から来たのんびり屋のパラダイス人との、「民族」の文化の違いが引き起こす労働問題、教育問題など異文化摩擦を疑似体験するためのロールプレイ役割演技(用CD教材ジークス社)である。

これを用いた授業では、生徒たちはそれぞれの立場を代弁し、相手の話を聞くことで多文化共生のあり方を学ぶ。生徒たちは本当に生き生きとしていると聞く。

藤原研究室は、国際理解教育のカリキュラム開発を手がけグローバル時代の教員養成を目指す、全国でも有名な社会科教育の研究室で、大学院生五名うち現職教員二名、学部生五名のゼミ生が在籍し、日夜、社会科および国際理解の授業づくりに没頭している。

藤原先生はまた、生涯教育課程・人間環境専攻の授業も担当されており、四名のゼミ生は文化・社会環境領域の中で国際理解を深めるため、海外ボランティア体験としてタイなどにスタディ・ツアーを行っている。

国際交流基金日米センターから助成を得て、目下「ハワイ学」の学習プログラムを開発中である先生に、「教育」とは何かを聞いてみた。教育とは「気づき」と「感動」であり、「自分のやっていることを再認識すること(ふりかえり)」であるという。(高井正三)

水の惑星 地球の水を科学する

佐竹・張研究室には、佐竹教授、張助教と大学院生七人、学部生六人が所属し、「水」を共通項として研究を行っている。

佐竹先生は、雨、雪及び地下水の化学成分や同位体を調べ、現在と過去の環境状態を研究されている。最近、よく話題になる酸性雨も守備範囲だという。酸性雨は窒素酸化物や硫酸酸化物を多く含んだPHが五・六以下の雨であるが、富山では九月頃から降り始め二月頃まで続く。石垣島でも同じ傾向がみられたので、主な原因は中国大陸上空の空気汚染が原因だろうとのこと。

七つの海を二〇〇〇年かけて循環する深層海流は、地球規模のエアコン効果をもたらしている。日本海にも二〇〇〇年規模で循環している深層海流がある。この海流を世界大循環のミニチュア版として研究されているのが、張先生だ。

研究室の学生は、庄川流域や黒部沖合に出かけ、自然を実験室として調査活動を行うので、必然的に社会性を身につけるといえる。

「本ブナ」一本ブナ千本という言葉がある。立山ブナ平に降る雨は地下水となり、約二〇年をかけて地中を流れ富山湾の海底で湧出する。その量は河川総流量の三〇%弱にもあたる。黒部や魚津の海底埋没林が残ったのはこの冷たい水のおかげだという。湧水はまた陸の栄養素を多く含み、その結果、多くのプランクトンが生息し、数多くの魚が集まってくるようになるのだそうだ。

水の惑星、地球の水の循環は、我々の大切なエコシステムなんだと理解した。(河野三郎)



◀左から、張先生、佐竹先生、そして学生たち

理学部 生物圏環境科学科 環境化学計測講座

佐竹・張 研究室

Environmental and Analytical Chemistry

ミスマッチのはなし

今様仕事さがし事情

増えているミスマッチによる失業

皆さんは雇用のミスマッチという言葉をご存知だろうか。失業の原因を、求人との絶対数が少なくして就職先が見つからない場合と、求人数はそこそこあるのだが、本人の希望する条件の就職先が見つからない場合とに分け、前者を需要不足失業、後者を構造的・摩擦的失業とし、後者の別名を雇用のミスマッチによる失業というのである。

最近この雇用のミスマッチによる失業が増えつつあり、昨年末の時点で失業している人の四人に三人がこのタイプの失業である(図1)。

ところで仕事を探している人にとって、ミスマッチによる失業は需要不足失業と比べてどのような意味を持つのだろうか。一見すると需要不足失業は求人そのものがないのに対し、ミスマッチによる失業では求職の条件を少しゆるめれば就職のチャンスは増す可能

性があるだけ、マシなように思える。いや実際そうという場合もある。しかし多くはもっと深刻である。例えば中高年層の場合、実質的な年齢制限によって就職の途がとぎされる場合が多い。もちろん賃金面で折り合わないことも少なくない。

では若年層のミスマッチ失業はどうだろうか。若年層の場合は、希望する職種がなかったり、正規雇用で就職したいのに、契約社員とか派遣社員とかの非正規雇用しかないという場合が多い。

若者に多い就職あきらめ組

ところでミスマッチに遭遇した際、中高年層と若年層では、対応に差が生じるようなのである。つまり中高年層の場合、養つべき家族を抱えていたり、多額の住宅ローン返済があるといった場合が多いという点に加えて、中高年層では以前勤めていた間に雇用保険を

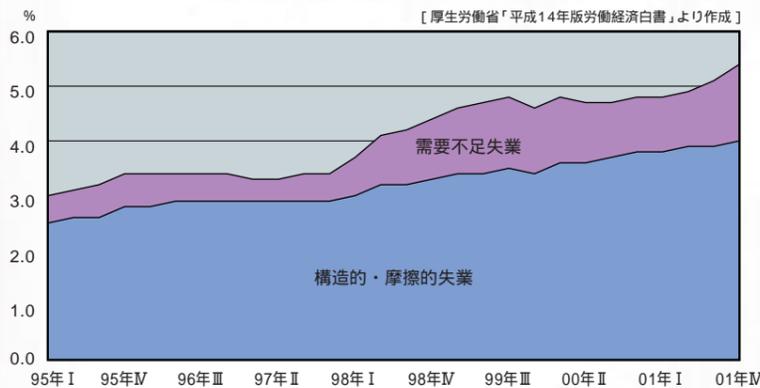


図1：需要不足失業率と構造的・摩擦的失業率の推移

払っており、その期間も長いことから、何らかの理由で離職し、すぐに適当な再就職先が見つからなければ、保険の支払いを受けるためにも求職活動をする。求職活動をすれば失業状態と認定され、保険支給の対象となる。

それに対して若年層の場合、特に新卒の場合は、就職活動にがんばりをみせる学生ももちろん多いが、とりあえずのアルバイトのクチならあるので、比較的簡単に就職をあきらめてしまう学生も少なくない様なのである。もちろん彼らは雇用保険には未だ加入していないし、一度就職して一定の加入期間がある場合でも、その期間はわずかである場合が多い。結局彼らは雇用保険とのかかわりも薄く、保険の受給が求職活動のインセンティブになることもない。つまり若年層は就職活動の厳しさに直面すると、活動そのものから離脱しがちである。こうして若年層の就職あきらめ組が大量に生まれている。

失業率にカウントされない

あきらめ組

この就職あきらめ組は限りなく失業状態に近いが、(完全)失業率は求職活動をしていることが計算の前提となるため、失業率にはカウントされない。労働経済白書のデータでは、例えばフルタイムの仕事があれば、それにつき

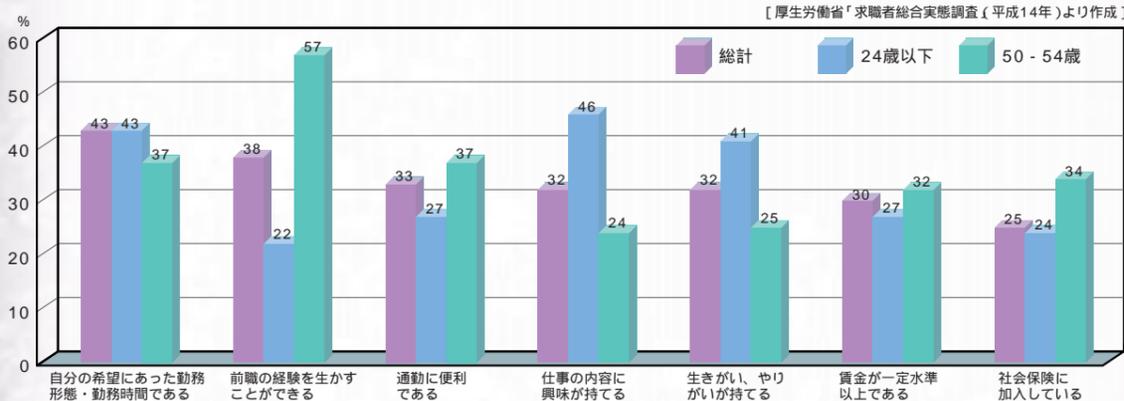


図2：重要と考えた求職条件

たいにもかかわらず、景気等の理由でフルタイムの仕事がないため、短時間就労で働いている人を完全失業者に加えて計算すると、日本の失業率は一〇%程度にまで跳ね上がり、この比率はアメリカと比較してもかなり高めである。

実はこのことは、富山大学でも例外ではない。経済学部の場合でみても、毎年の卒業生に占める就職希望者の比率、つまり就職希望率は平成三年が九二%であったが、平成十三年では七二%と、この一〇年で二〇ポイントも減っているのである。その全てが就職あきらめ組ではないにしても、無視できない状況であることは確かだ。

適性は変わる？

では対策はあるのだろうか。求職する側に限って言えば、私が気になるのは、若者の中心「仕事への適性」への過度の思い入れがあるように感じられる点である(図2)。もちろん適性を考えることが無駄であると言っているのではない。そうではなく、適性というものはもともと当人に備わっている面もあるが、自分の意思で変えたり、作り上げていくことのできるものである、ということが理解されていないように思えるのである。この点を理解しているかどうかだけで、就職への考え方がかなり変わるのではないかと思うのだが。



坂 幸夫

Saka Yukio (さか ゆきお)

経済学部 経済学科 政策科学講座
 1950年 11月生まれ
 1976年 法政大学大学院社会科学部研究科修士課程修了
 1976年 労働調査協議会調査研究員。同協議会主任研究員を経て
 2002年 富山大学経済学部教授
 専門分野：労働経済論



アメリカの研修で学んだこと

日俣 詠里子 (ひまた えりこ)

学生部留学生課留学生係
平成13年度文部科学省事業「国際教育交流担当職員長期研修プログラム(通称LEAP)」に参加
13年6月から14年6月まで米国モンタナ州立大学及び南インディアナ大学において語学研修及び実務研修

モンタナ州立大学事務局 (モンタナホール)



日本人補習校にて



かく受け入れてくれた。日本人である私に常に意見を求め、尊重して頂いている。そして仕事において自分の意見を持つことの大切さを学んだ。

「今日からこれがあなたの机よ。家族の写真飾ってほしいし、音楽を聴きながら仕事してもいいから。」ハイドイのこんな言葉から、私の南インディアナ大学でのインターンシップは始まった。部屋の中を見渡すと、殺風景な日本の職場とは違い、留学生からの各国のおみやげであふれていた。毎日がこのような驚きや戸惑いの連続だった。しかし、そんな私をオフィスの人々は一人の職員として温



インターンシップを行ったオフィスで、ハイドイ課長と筆者

語学研修に加えて、このような実務研修を行ったことは大変貴重な経験となった。今後は、研修で学んだことを生かせるよう努力したい。

研修では、各種行事の手伝い、留学生に関する調査、会議等のオプザブに携わった。また、学内の他部署の仕事も把握するためのインタビュなども行った。特にそのインタビュの結果、学生サービスの充実や地域への貢献ということが、大学運営において重要視されていると感じ、大変勉強になった。また、研修の合間には大学の授業を聴講したり、州立短大や日本の子供が通う日本人補習校を訪れたりする機会を得た。

平成15年度 公開講座のお知らせ

平成15年度公開講座は教養、語学、情報処理関連健康スポーツ、体験の分野で合計43講座を開設します。さあ、富山大学で学び、考え、交流しましょう。

公開講座の問合せ先
生涯学習教育研究センター
電話：076-445-6956
ファクス：076-445-6960

- 【教養講座】
- 芦峯寺の古文書を読む 5月3日・5月31日 7時間30分 定員：10人
 - 加賀藩武士の道中記を読む 5月6日・5月27日 6時間 定員：10人
 - 日本語教育「基礎理論編」 5月13日・6月3日 8時間 定員：15人
 - 富山の自然とその恵み 5月13日・7月15日 15時間 定員：15人
 - 富山県における日本海研究の方法と課題 6月3日・6月21日 8時間 定員：15人
 - 子どもが生き生きする手づくりおもちゃ 指導者養成講座 6月4日・7月16日 8時間 定員：15人
 - あそび力・子ども力 6月8日・8月31日 12時間 定員：45人
 - 日常の音と映像を読み解く 6月14日・7月12日 7時間30分 定員：10人
 - 開発と自然保護のはざまへ 少数民族文化の現在 6月21日・7月19日 7時間30分 定員：10人
 - 山歩きを楽しむその① 7月5日・7月6日 9時間 定員：15人
 - 考古学から探る富山のルーツ 7月12日・8月3日 14時間 定員：10人
 - 市町村合併と地域の活性化 8月23日・8月24日 7時間30分 定員：30人
 - 世界と地域のはなし 9月3日・9月26日 7時間30分 定員：10人
 - 現代の教育をどう見るか 9月5日・10月3日 7時間30分 定員：15人
 - わかりやすいワインのはなし 9月13日・10月18日 9時間 定員：10人
 - 子どもの発達を考える 9月16日・10月28日 9時間 定員：20人
 - 山歩きの楽しみその② 9月20日・9月21日 9時間 定員：15人
 - 食文化から見たヨーロッパ中世 10月30日・11月27日 10時間30分 定員：20人
 - 中央ユーラシアの民族と歴史 11月20日・12月18日 7時間30分 定員：25人

- 【語学講座】
- フランス語 初級 5月8日・7月10日 20時間 定員：20人
 - 入門中国語Ⅰ 5月10日・6月28日 12時間 定員：20人
 - ドイツ語入門 5月10日・7月5日 16時間 定員：15人
 - フランス語 中級Ⅰ 5月10日・7月12日 20時間 定員：20人
 - 初級英会話 5月10日・7月12日 15時間 定員：20人
 - 朝鮮語 中級 5月12日・7月14日 20時間 定員：10人
 - 中級英会話 10月5日・12月14日 15時間 定員：20人
 - 入門中国語Ⅱ 10月18日・12月20日 20時間 定員：20人
 - フランス語 中級Ⅱ 10月18日・12月20日 20時間 定員：20人
- 【情報処理関連講座】
- IT講座(I) Windows入門(土曜コース) 5月10日・5月24日 18時間 定員：20人
 - IT講座(I) Windows入門(日曜コース) 5月11日・5月25日 18時間 定員：15人
 - IT講座(II) Word 6月7日・6月8日 12時間 定員：20人
 - IT講座(III) Excel 6月21日・6月22日 12時間 定員：20人
 - IT講座(IV) PowerPoint 7月5日・7月6日 12時間 定員：20人
 - 教師のための情報教育実践講座 7月28日・8月20日 18時間 定員：30人
 - IT講座(V) Photoshop Element 10月4日・10月5日 12時間 定員：20人
 - 高齢者のためのインターネット活用講座 10月7日・11月4日 12時間30分 定員：20人
 - IT講座(VI) ホームページ・ビルダー 10月25日・10月26日 12時間 定員：20人
 - IT講座(VII) 筆まめ 11月8日・11月9日 12時間 定員：20人
- 【健康・スポーツ講座】
- 「からだ気づき」・「体ほぐし」 6月7日・7月12日 7時間30分 定員：15人
 - ゴルフ初級者(コース) 7月31日・8月8日 15時間 定員：20人
 - 親子スキー教室 1月31日・2月1日 15時間 定員：20人
- 【体験講座】
- コンピュータで地図をつくらう 8月1日 5時間 定員：30人
 - 楽しいサイエンス&テクノロジーサマースクール 8月4日・8月5日 12時間 定員：45人

学内探訪 工学部の古いシャンデリア

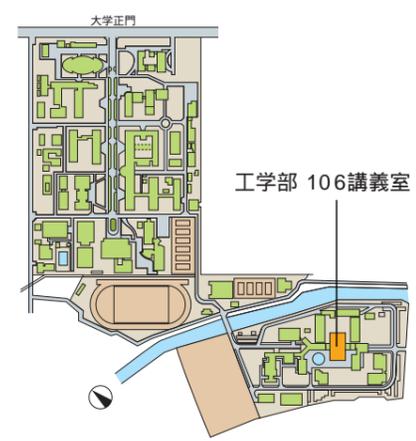
大正時代に作られたシャンデリアが、本学工学部の一〇六講義室の前にひっそりと備え付けられています。今回はこのシャンデリアの由来を簡単に紹介します。

本学の工学部は、今から十九年前の昭和六十年九月に長年の希望が叶い、高岡市から五福へ統合移転しました。それまでは高岡市内の木造校舎で教育と研究が行われていたのです。

工学部旧校舎は、その前身である旧制高岡高商の学舎として大正十四年六月に建築されました。当時の高岡市民にとって最新の木造建築群は大きな誇りであったといわれています。また、一枚の図面から高岡高商、彦根高商及び和歌山高商の三校舎が作られたという変わったいわれも持っていました。この学舎からは、高岡高商三〇四四名、高岡工専七五一名、本学工学部六六八〇名の卒業生が巣立っています。

古いシャンデリアは、フランス風洋風建築の工学部講義室(学生たちは「鹿鳴館」と名付けていたそうです)の天井にあったのです。講義室では、高岡高商時代には厳粛な入学式や卒業式、工学部時代には学生たちのダンスパーティーなどが行われ、このシャンデリアはそれらを静かに照らしてきました。

旧校舎の取り壊しに際し、その歴史と伝統を後世に引き継ぐため、正門にあった門柱は五福の経済学部と新工学部にそれぞれ移設され、併せて、この古いシャンデリア一基も工学部校舎に移設されたのです。(総務部企画室)



Reader's Voice

読者からの声



新鮮で知的興味が満足できる。(入善町M.Y.)
懐かしく読んだ。(水見市I.S.)
楽しく講義を受けるような気持ちで読んでいます。(富山市N.N.)
教育研究に活躍されている様子、よくわかる。(砺波市T.H.)
きれいにレイアウトされ読みやすい。(富山市S.K.)
毎号楽しみにしています。(立山町Y.K.)

読者の皆様ありがとうございます。編集委員会では、こんな研究やってない?とか、こういうテーマをとりあげて!という読者の声をお待ちしています。第9号についてもご意見・ご感想をどしどしお寄せください。

(編集委員会事務局)

編集後記

「早春の傳」

久しぶりに年間通じて一年生を担当した。後期始めの学生諸君の「惚け振り」は、それは見事なくらいで、虚ろな眼と鈍い反応、それに目立つ欠席と遅刻という具合。入学した頃の緊張感前期と後期の間にすっかり剥がれ落ちてしまったようだ。ところで、大学の同窓会の案内が今年も届いた。当時懐かしくなるのか、声がかかるとホイきたと出席、昔話に花がさいた。初めてダンスパーティーのこと、一杯39円のコーヒーで何時間も茶店で話し込んだこと、あの大地震に遭遇したこと、などなど。そういう、あちこちで恋が芽生え始めていたのも夏休みも過ぎた頃だったかもしれない。とはいえ、僕も友人達もその時期、緊張感を欠いていたという記憶はない。前期の試験が9月半ば頃に終了し、その結果が出てくる頃に後期の授業が開始され、惚けている暇がなかったのだ。今の学年暦になったのはそれなりの理由もあり、教員にとってメリットもある。だから元に戻すことはないだろうが、一部の科目だけでも9月半ばに試験をすれば、学生諸君の惚け防止に効果があるだろう。その後の授業への取り組みも違ってくるかもしれない。少なくとも試みる価値はある。そんなことを思い巡らすうちに、後期の試験が終わった。小テストや中間試験が効を奏したせいか、結果はそこそこだった。しかし、あの「惚け振り」はやはり気になる。(W.Y.)

TOM'S Magazine

富山大学広報誌 TOM'S トムズマガジン 9号

大学の動き
「北陸地区国立大学連合」が発足



協調を誓いあう7国立大学の学長・副学長(写真:金沢大学提供)

北陸3県の7国立大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井大学、福井医科大学、富山大学)は12月24日、北陸地区国立大学連合の結成に合意し、協定に調印しました。この連合は、各大学の独自性を維持しつつ、大学間の連携・協力を推進し、科目の履修や進学に対する選択肢と機会の拡大、高度で幅広い学術研究や共同研究の展開、環日本海の拠点としての情報発信、教育・研究・社会貢献活動の推進のための基盤と体制の整備、に取り組み、それぞれの教育研究の活性化を図ることを目指し、全国的にも注目されています。

表彰
丸山泰宏さんが
日本機械学会「優秀講演賞」を受賞
10月14日 大学院理工学研究科博士前期課程2年の丸山泰宏さんが、日本機械学会平成14年度材料力学部門講演会(山口大学)において発表した研究論文「SNCM439鋼

の超長寿命疲労挙動とシヨット・ピーニングの影響」で優秀講演賞を受賞しました。丸山さんは機械知能システム工学専攻所属。指導教官は塩澤和章教授。

高橋純講師が日本教育工学会研究奨励賞を受賞
11月3日 高橋純教育学部講師が、高齢者に読みやすいホームページの文字配色についての調査研究が優秀であるとして、日本教育工学会研究奨励賞を受賞しました。高橋講師は情報教育課程教育情報システム専攻所属で、専門は教育工学。

森井祐一さんが日本材料学会「優秀研究発表賞」を受賞
11月29日 大学院理工学研究科博士前期課程2年の森井祐一さんが、(社)日本材料学会第26回疲労シンポジウム(於:工学院大学)において発表した研究論文「介在物を起点とする高硬度鋼の内部疲労き裂の発生・進展挙動」で優秀研究発表賞を受賞しました。森井さんは機械知能システム工学専攻所属。指導教官は塩澤和章教授。

佐々木桃聡さんが第7回ドイツ語スピーチコンテストで優勝
12月7日に開催された第7回ドイツ語スピーチコンテスト(主催:北陸大学)において、人文学部言語文化学科ドイツ言語文化コース3年

の佐々木桃聡さん(写真左がC部門(上級)で優勝、同コース2年の佐藤輝美さん(写真右)がB部門(中級)3位の好成績をあげました。

山地啓司教授が日本体育協会から表彰
12月14日 山地啓司教育学部教授が、財団法人日本体育協会の公認スポーツ指導者制度の確立とスポーツ科学の普及に貢献したとして同協会から表彰されました。山地教授は学校教育員養成課程保健体育専攻所属で、専門は運動生理学。

佐藤倫代さんが第4回全国学生韓国語スピーチコンテストで最優秀賞を受賞
12月14日に開催された第4回全国学生韓国語スピーチコンテスト(主催:神田外語大学)において、人文学部言語文化学科朝鮮言語文化コース4年の佐藤倫代さん(写真左)と同コース3年の長谷川理左さん(写真右)が予選を通過。本選では、ユモアたっぷりなスピーチした佐藤さんが最優秀賞に輝きました。

鈴木由紀さんが富山商工会議所から表彰
12月25日 教育学部4年の鈴木由紀さんが、富山商工会議所が10月に実施した日本商工会議所第166回珠算検定1級に満点で合格。北信越地区では11年ぶりの快挙として同会議所から表彰されました。鈴木さんは情報教育課程教育情報システム

河合洋昇さんが50キロ競歩の日本学生最高記録を樹立
1月26日 大学院教育学研究科2年の河合洋昇さんが、神戸市で開催されたアテネオリンピック標準記録突破記録会の50キロ競歩に出場し、4時間2分26秒の日本学生最高記録を樹立しました。河合さんは保健体育専攻所属。指導教官は山地啓司教授。

専攻を3月に卒業、4月からは日本ソフトテニス部に勤務。

作井正昭教授がエネルギー管理功績者表彰(電気部門)を受賞
2月18日 作井正昭工学部教授が、多年にわたりエネルギー管理業務の推進に努力し、エネルギー使用の合理化に貢献したとして、中部経済産業局長から表彰されました。

竹田良和さんが第58回国民体育大会冬季大会で2位入賞
2月24日 大学院教育学研究科1年の竹田良和さんが、第58回国民体育大会冬季大会(なよろサンピラー国体。北海道名寄市で開催)スキー・バイアスロン競技会第3日、スキージャンプ男子B10キロクラシカルに出場し、2位に入賞しました。竹田さんは保健体育専攻所属。指導教官は山地啓司教授。

河合さん(写真左)と長谷川さん(写真右)が予選を通過。本選では、ユモアたっぷりなスピーチした佐藤さんが最優秀賞に輝きました。

作井教授は電気電子システム工学部エネルギー変換工学講座所属で、専門は電気機器工学、パワーエレクトロニクス。

特集・対談



長谷川総一郎 富山大学教授
相本 芳彦 KNBAアナウンサー

伝統木彫刻の継承とパブリックアートの可能性

研究紹介 富山湾の海底はどのような地形になっているか

大学人物ファイルNo.6 柳下 詩織氏

施設紹介 機器分析センター

研究室への招待

BOOK REVIEW「ブラックジャックによろしく」環境と化学 グリーンケミストリー入門

カイセツの鉄人 ミスマッチのななし 今様仕事さがし事情

TOM'S Essay 学内探訪工学部の古くシャンドンテリア

No.9 Spring 2003

本誌は、富大構内などで無料配布しています。郵送のご希望もお受けいたします。本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。無断転載はご遠慮ください。本誌は、古紙100%の再生紙と大豆インクを使用しています。

TOM'S Magazine 編集委員会 渡邊 義之 理学部教授(委員長) 加藤 重広 人文学部助教授 小林 真 教育学部助教授 河野 三郎 経済学部助教授 森脇 喜紀 理学部助教授 伊藤 研策 工学部助教授 高井 正三 総合情報処理センター助教授 前田 邦樹 総務部企画室長